

途上国におけるプロジェクト実施の難しさ

2022年8月

田中 彩

私は2020年に産婦人科専門医を取得後、公衆衛生学修士取得のために英国に留学し、2022年6月～8月に国立国際医療研究センター(NCGM)国際医療協力局の短期フェローとして国際保健を学びました。その一環として、カンボジアにおける子宮頸がんプロジェクト(JICA 草の根技術協力事業「女性のヘルスプロモーションを通じた包括的な子宮頸がんサービスの質の改善プロジェクト」)の現地派遣に同行させていただきましたのでご報告します。

2022年7月25日より8月4日まで、NCGMの春山先生、神田専門家、竹内専門家と共に、カンボジアのプノンペンを訪問し、プノンペン州教育局やカンボジア産婦人科学会(SCGO)の方々との協議、国立母子保健センターの視察、クメールソビエト病院でのデータ収集、健康教育を行う予定の小学校の視察を行いました。途上国のプロジェクトに携わることも、現地の病院や小学校を視察することも初めての経験でしたが、経験豊富な先輩方のご指導のもと、大変刺激的で充実した2週間を過ごすことができました。

今回の渡航の主な目的は、小学校教員に対する健康教育の実施とその評価を開始するための準備、環境を整えることでした。渡航前にもSCGO理事の先生方とのオンライン協議に何度か参加させていただいていましたが、日本側が考える健康教育評価の方法を理解してもらうのに時間がかかり、さらに現場で実際に行うステップを具体的に考えていくと、次から次へと課題が見つかりました。たったひとつの物事を決めるだけであったとしても、その都度各方面の関係者に理解してもらうように働きかけ許可をとる必要があり、解決したと思ったら別の課題が見つかり、プロジェクトの内容や実施方法に再度変更を加える必要が生じる、という過程の繰り返しだということを実感しました。

途上国でプロジェクトを行うことは、一筋縄ではいかないということ、時間と労力を費やすことを惜しんではいけないということを感じることができたことは、私にとって大変貴重な経験になりました。その反面、難渋する複数回の協議を経て、遂にひとつの着地点にたどり着いたときは、想像以上の喜びと達成感がありました。思いもよらないところでつまずき、常に予想を超える出来事が起こること、ここに国際協力の面白さがあるのかもしれないと感じています。

さらに今回の渡航では、本プロジェクト活動の合間に、フェローの研修の一環として婦人科手術の見学をする機会もいただきました。手術中に頻りに停電が起き、一時的にはありますが、麻酔器も含め全ての機械の電源が落ちたことには大変驚きました。又、NICUを視察させていただいた際には、NICU内に医療従事者はおらず、点滴が閉塞したアラームが鳴りっぱなしになっていたり、指示された速度とは全く違う速度で点滴が投与されているという状況を目の当たりにし、大変大きな衝撃を受けました。このような状況を

見て、国際協力における援助は、終了後も定期的に「実施」状況をフォローしていく必要があるということを感じました。そして支援を受ける側が必要を実感し、自分たちのプロジェクトとして進めていく意志がないと、プロジェクト終了後、一定の時間がたつと「実施」がなおざりにされてしまうということを改めて感じた瞬間でした。

今回の渡航では関係者との協議や交渉といった準備を行い、開始には至りませんでした。SCGO サイドが自己のプロジェクトとして主体的に協議をすすめ、情熱を持って、教育局、教員たちに働きかけている姿が印象的でした。このプロジェクトは8月下旬の、対象80校の校長先生らへの健康教育・検診実施説明会を皮切りに開始される予定ですが、このプロジェクトが滞りなく進行し、カンボジアの女性の子宮頸がんに対する理解が深まり、近い将来、誰もが検診を容易に受診できるようなシステムが整うことを願っています。



左から NCGM 春山医師、SCGO バッティ秘書、田中医師、SCGO ナレン秘書、NCGM 神田助産師、琉球大学竹内研究員



プロジェクト対象病院の婦人科手術台帳を確認中